

研究業績等に関する事項				
著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文))				
1.				
(著書(和文))				
1. イルカ・クジラ学— イルカとクジラの謎 に挑む	共編著	2002年12月	東海大学出版社、 280頁	村山司・中原史生・森恭一編著 序章「イルカ・クジラ学とは何か」 1-10頁(共著)、第1章「イルカは 鳴き声で何を伝えているのか-音響 行動」13-33頁(単著)
2. 声を利用した海洋生 物の音響観測	共著	2006年5月	海洋音響学会、210 頁	赤松友成編 第1章第3節「中周波鳴音によるイル カの探知」52-64頁(単著)
3. 東海大学自然科学叢 書第3巻 鯨類学	共著	2008年5月	東海大学出版会、 450頁	村山司編著 第3章「聴覚」133-154、第7章「社 会」238-290(ともに単著)
4. 常磐大学地域貢献シ リーズ3 グローカ ルな危機における生 活と環境の再生	共著	2010年11月	常磐大学・常磐短期 大学、230頁	第2回「生物多様性から考える『つ ながりの再生』」17-47頁(単著)
5. ケトスの知恵-イル カ・クジラのサイエ ンス-	共著	2012年2月	東海大学出版会、 212頁	村山司・森阪匡通編著 第8章「イルカの社会とコミュニケー ション」145-167頁(単著)
6. 新博物館学教科書 博物館学 I -博物館 概論・博物館資料論	共著	2012年4月	学文社、250頁	大堀哲・水嶋英治編著 第2部 博物館資料論 第3章 博物館 資料と調査研究活動 第3節 種別別 調査研究 9「水族館」177-181頁(単 著)
7. 絶景・秘境に息づく 世界で一番美しい シャチの図鑑	共著	2019年7月	誠文堂新光社、160 頁	水口博也編著 「知床・羅臼のシャチの暮らし」73- 79頁(共著:三谷曜子・大泉宏・中 原史生・斎野重夫・山本友紀子・吉 岡基)
6. 生き物と音の事典	共著	2019年11月	朝倉書店	(一社)生物音響学会編 第4章 哺乳類3 海洋動物 4-8「イル カの行動と生態」158-159頁(単著)
(学術論文(欧文))				
1. Establishment of receiving system of whale sound using submarine cables	共著	1997年3月	Proceedings of International Workshop on Scientific Use of Submarine Cables, 78-81 (査読なし)	海底ケーブルを用いた多目的地球環 境モニターネットワークシステムの 開発に関する研究の一環として、生 物動態観測システムを用いた鯨類の 追跡調査方法の検討を行った。 著者名: Miyazaki N & <u>Nakahara F</u>
2. Target discrimination by an echolocating finless porpoise, <i>Neophocaena phocaenoides</i>	共著	1997年10月	Marine Mammal Science, 13(4): 639-649 (査読あり)	スナメリのエコーロケーション(反 響定位)能力を調べる目的で標的弁 別実験を行い、その結果をまとめた 論文である。 著者名: <u>Nakahara F</u> , Takemura A, Koido T & Hiruda H

3. A survey on the behavior of captive odontocetes in Japan	共著	1997年11月	Aquatic Mammals, 23(3): 135-143 (査読あり)	国内の水族館で飼育されている鯨類全種にわたり飼育下での行動の比較を行い、飼育・生息環境と鯨類の行動との関係についての考察を行った。 著者名: <u>Nakahara F</u> & Takemura A
4. Intra-specific variation in vocalizations of "Tappa-naga", the northern form of short-finned pilot whale	単著	1999年3月	Proceedings of 1998 International Forum on Dolphins and Whales. 44-49 (査読なし)	タッパナガ(北方系コビレゴンドウ)の鳴音の種内変異に関する研究。この種の鳴音を解析した結果、個体変異と群間変異の二つの変異の存在が考えられた。
5. Influences of the underwater man-made noise on acoustic behavior of dolphins	単著	1999年3月	Otsuchi Marine Science, 24: 18-23 (査読あり)	欧米で行われた騒音汚染の海棲哺乳動物への影響調査結果について、イルカの音声行動に与える影響に焦点を当てて紹介するとともに、独自のデータから日本近海で考えられる騒音汚染の影響を紹介した。
6. Social functions of cetacean acoustic communication	単著	2002年11月	Fisheries Science, 68(Supplement I): 298-301 (査読あり)	鯨類の音声コミュニケーションについて、社会的機能の側面から考察を行った。
7. Geographical variation in the whistles of the Indo-Pacific bottlenose dolphin populations	共著	2003年8月	Proceedings of the 1st Conference on Acoustic Communication by Animals, 167-168 (査読あり)	日本近海に生息するミナミハンドウイルカのホイッスルにおける地理的変異に関する研究。 著者名: Morisaka T, Shinohara M, <u>Nakahara F</u> & Akamatsu T
8. Abundance estimate of finless porpoises off the Pacific coast of eastern Japan based on the aerial survey	共著	2003年12月	Mammal Study, 28(2): 103-110 (査読あり)	セスナ機を使用した目視調査に基づく東日本沿岸におけるスナメリの個体数推定。 著者名: Amano M, <u>Nakahara F</u> , Hayano A & Shirakihara K
9. Ambient noise differences may cause the geographical variations on the acoustic signals of the Indo-Pacific bottlenose dolphin (<i>Tursiops aduncus</i>) populations	共著	2005年5月	Journal of Mammalogy, 86(3): 541-546 (査読あり)	日本近海に生息するミナミハンドウイルカの音響信号の地理的変異の要因が各海域の環境雑音にあることを突き止めた研究。 著者名: Morisaka T, Shinohara M, <u>Nakahara F</u> & Akamatsu T
10. Geographic variations in the whistles among three Indo-Pacific bottlenose dolphin (<i>Tursiops aduncus</i>) populations in Japan	共著	2005年5月	Fisheries Science, 71(3): 568-576 (査読あり)	日本近海に生息するミナミハンドウイルカの3つの個体群間にみられるホイッスルの地理的変異に関する研究。 著者名: Morisaka T, Shinohara M, <u>Nakahara F</u> & Akamatsu T

11. Recent studies on captive cetaceans in Japan: Working in tandem with studies on cetaceans in the wild	共著	2010年11月	International Journal of Comparative Psychology, 23(4): 644-663 (査読あり)	日本の水族館で行われた飼育下のイルカを対象とした最新の研究を紹介。野生個体との比較研究も紹介。 著者名: Morisaka T, Kohshima S, Yoshioka M, Suzuki M & <u>Nakahara F</u>
12. Vocal exchanges of signature whistles in bottlenose dolphins (<i>Tursiops truncatus</i>)	共著	2011年1月	Journal of Ethology, 29(2): 309-320 (査読あり)	ハンドウイルカのシグネチャーホイッスルの機能に関する研究。鳴き交わり行動に時間的規則性があることを霊長類以外の動物でははじめて発見し、一定のルールを持って信号のやりとりが行われていることを報告。 著者名: <u>Nakahara F</u> & Miyazaki N
13. Spontaneous prosocial choice by captive bottlenose dolphins, <i>Tursiops truncatus</i>	共著	2017年1月	Behavioural Processes, 135:8-11 (査読あり)	ハンドウイルカが自発的に向社会的な選択をすることを報告。 著者名: <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Sato R, Ikeda H, Komaba K & Kawakubo A
14. Social object play between captive bottlenose and Risso's dolphins	共著	2018年5月	PLoS ONE, 13(5): e0196658, 1-7 (査読あり)	ハンドウイルカとハナゴンドウという異種間での「ものを伴った社会的遊び」について世界で初報告。水族館飼育スタッフが行った観察を基に論文化。中原は論文指導と英訳、雑誌編集者とのやり取り、論文修正を担当。 著者: Ikeda H, Komaba M, Komaba K, Matsuya A, Kawakubo A & <u>Nakahara F</u>
15. Abundance decline in the narrow-ridged finless porpoise population off the Pacific coast of eastern Japan	共著	2019年7月	Population Ecology, 61(3):325-332 (査読あり)	東日本太平洋沿岸(宮城~千葉)に生息するスナメリ個体群の個体数減少について報告。セスナ機からの目視調査の結果、東日本大震災後、特に宮城・福島沿岸での減少が著しいことを確認した。 著者: Shirakihara K, <u>Nakahara F</u> , Shinohara M, Shirakihara M, Hiramatsu K & Irie T
16. Mitochondrial DNA Haplotypes of Killer Whales around Hokkaido, Japan	共著	2021年7月	Mammal Study, 46(3):1-7 (査読あり)	北海道東部海域に來遊するシャチのミトコンドリアDNAを調べ、レジデント型とオフショア型の2つの異なるエコタイプ(生態型)のシャチが來遊している可能性を発見した。 著者: Yoko Mitani, Yuki F. Kita, Shigeo Saino, Motoi Yoshioka, Hiroshi Ohizumi, <u>Fumio Nakahara</u>
(学術論文(和文)) 1. 真骨魚類の尾鰭の形態と遊泳行動との関係	単著	1993年12月	京都大学農学部附属水産実験所報告, 2: 3-5 (査読なし)	真骨魚類全般における尾鰭の形態と遊泳行動との関係について、適応と進化の両面から解析を行った。

2. イルカのエコーロケーションによる標的識別能力	単著	1994年6月	勇魚, 20: 42-43 (査読なし)	飼育下のスナメリを用いて行ったエコーロケーションによる標的識別実験の結果を報告。
3. 音響研究と水族館	単著	1995年12月	勇魚, 23: 39-40 (査読なし)	水族館におけるイルカの音響研究を概説し、自身が実際に行ってきた研究を紹介。
4. イルカの音声発達と個体間音声行動	単著	1998年3月	国際海洋生物研究所報告, 8: 43-51 (査読なし)	水族館で生まれたイルカの音声発達研究の結果と、水族館での観察から得られた個体間音声行動の結果を報告。
5. イルカの音声行動	単著	1998年9月	月刊海洋, 30(9): 536-540 (査読なし)	イルカ類の音声行動の機能と発達に関する研究について、その現状と動向を紹介。
6. スナメリの鳴音の特性とエコーロケーション能力	単著	2003年8月	月刊海洋, 35(8): 571-574 (査読なし)	スナメリの鳴音の特性とエコーロケーション能力について報告。
7. 鯨類音響学のすすめ	単著	2005年6月	勇魚, 42: 38-45 (査読なし)	鯨類音響学について解説。
8. 水族館におけるイルカの音響研究	単著	2006年8月	海洋と生物, 28(4): 355-361 (査読なし)	日本の水族館を舞台に実施されてきたイルカの音響研究の歴史を紹介するとともに、最新の研究を紹介。
9. 鯨類の鳴音にみられる種特異性と種内変異	単著	2008年12月	月刊海洋, 40(10): 390-395 (査読なし)	日本近海に生息する鯨類の鳴音にみられる種特異性と種内変異について報告。
10. 釧路沖に出現したシャチの個体識別	共著	2013年12月	勇魚, 59: 22-25 (査読なし)	釧路沖に来遊するシャチの基礎知見の収集を目的として写真による個体識別を実施。知床・根室海峡の識別個体との照合も。 著者名：幅祥太・斎野重夫・大泉宏・ <u>中原史生</u> ・三谷曜子・山本友紀子・青山桜子・吉岡基
11. 海のこころ、森のこころ—鯨類と霊長類の知性に関する比較認知科学—	共著	2014年6月	哺乳類科学, 54(1): 103-106 (査読なし)	人間の知性の進化の解明を現生種間の比較を通して目指す研究の報告。 著者名：友永雅己・森阪匡通・ <u>中原史生</u> ・足立幾磨
12. アクリル窓に設置した水中マイクの受波感度—水族館におけるイルカ音声研究の簡便化を目指して—	共著	2016年3月	東海大学海洋研究所報告, 37: 1-6 (査読あり)	水族館動物の鳴音を簡便に録音できるシステムの構築を目的に、アクリルに音を透過させた際のマイク感度への影響を検証。 著者名：吉田弥生・森阪匡通・ <u>中原史生</u> ・斎藤繁実
13. 北海道周辺に生息するシャチの社会構造と行動圏の利用様式：生息地保全への基礎研究	共著	2016年4月	自然保護助成基金成果報告書, 23: 93-106 (査読なし)	北海道周辺に生息するシャチの社会構造と行動圏の利用方式について報告。 著者名：大泉宏・吉岡基・三谷曜子・ <u>中原史生</u> ・佐々木友紀子・幅祥太・青山桜子・斎野重夫・佐藤晴子
14. 北海道東部海域におけるシャチの分布と生息環境	共著	2017年3月	知床博物館研究報告, 39: 1-12 (査読なし)	北海道東部海域におけるシャチの分布に与える環境要因を報告。 著者名：宮本春奈・岩原由佳・幅祥太・ <u>中原史生</u> ・大泉宏・斎野重夫・山本友紀子・吉岡基・三谷曜子
15. イルカ音響タッチパネルの開発と音響および認知研究への活用	単著	2017年6月	勇魚, 66号: 25-29 (査読なし)	イルカ音響タッチパネルの開発と音響および認知研究への活用について報告。

16. 知床海域におけるシャチの生息地利用の解明と持続的観光資源としての保全に関する研究	共著	2018年12月	自然保護助成基金成果報告書, 27:179-188 (査読なし)	知床海域におけるシャチの生息地利用を調べ、採餌や社会行動を行う重要な海域であることを明らかにした。観光資源として保全の必要性があることも指摘。 著者: 三谷曜子・宮本春奈・大泉宏・吉岡 基・ <u>中原史生</u> ・山本友紀子・幅 祥太・斎野重夫
17. 根室海峡で確認された日本初記録のシャチ (<i>Orcinus orca</i>) 白色個体	共著	2018年12月	哺乳類科学 60(2), 243-248 (査読あり)	2019年5月と7月に北海道知床半島沖の根室海峡で観察されたシャチ白色個体の報告。これまで日本沿岸で確認されたという報告は無く、日本における初記録と考えられた。 著者: 大泉宏, 幅祥太, <u>中原史生</u> , 三谷曜子, 北夕紀, 斎野重夫, 吉岡基
(学位論文) 1. スナメリ <i>Neophocaena phocaenoides</i> のバイオソナーに関する基礎的研究	単著	1994年3月	長崎大学平成5年度修士論文, 74pp	スナメリのバイオソナー音の特徴とエコーロケーション能力に関する研究。世界ではじめスナメリのエコーロケーション能力に関する実験を実施し、ハンドウイルカと遜色のない能力を備えていることを報告。
2. Vocal exchanges and recognition in bottlenose dolphins, <i>Tursiops truncatus</i>	単著	1998年12月	東京大学平成9年度博士学位論文, xi+96pp	ハンドウイルカのシグネチャーホイッスルの機能に関する研究。鳴き交わし行動に時間的規則性があることを霊長類以外の動物でははじめて発見し、一定のルールを持って信号のやりとりが行われていることを報告。
(紀要論文) 1. 自然史博物館の環境教育と地域振興	単著	2001年3月	コミュニティ振興研究, 第1号: 58-63 (査読なし)	自然史博物館における環境教育と地域振興の実践例を紹介。
2. 高齢者福祉施設における動物介在活動の現状と課題	共著	2008年3月	コミュニティ振興研究, 第8号: 55-68 (査読なし)	茨城県内の高齢者福祉施設を対象に実施したアンケート調査の結果とそこから明らかになった課題を報告。 著者: 高塚瞳・ <u>中原史生</u>
3. 人工雑音が野生動物に与える影響	単著	2010年3月	コミュニティ振興研究, 第10号: 169-179 (査読なし)	人工雑音が野生動物に与える影響を解説し、学内課題研究として実施した調査の結果を報告。
4. 茨城県内の私立幼稚園における動物飼育の現状と課題	共著	2015年3月	コミュニティ振興研究, 第20号: 1-15 (査読あり)	茨城県内の私立幼稚園を対象に実施したアンケート調査の結果とそこから明らかになった課題を報告。 著者: 井坂みさき・ <u>中原史生</u>
5. 茨城県におけるイノシシの狩猟の現状と継続に向けての考察	共著	2018年3月	常磐総合政策研究, 第1号: 53-68 (査読あり)	茨城県におけるイノシシ狩猟の現状と継続に向けての課題を猟友会を対象としたアンケート調査の結果を踏まえて報告。 著者: 鈴木睦子・ <u>中原史生</u>
(辞書・翻訳書等) 1.				

(報告書・会報等)				
1. 特集：鯨類研究で学位をとる-4 私はこうして学位をとった-学位取得狂想曲-	単著	1998年12月	勇魚, 29: 24-29	勇魚会機関誌の特集への寄稿文。自身が鯨類研究で学位をとるまでの過程を紹介。
2. タップナガ鳴音の音響特性と種内変異	単著	1999年3月	平成8年度～平成10年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(c)(2))研究成果報告書「室蘭沖におけるタップナガの個体識別法を用いた社会構造の研究」45-53頁	コビレゴンドウの北方系個体群であるタップナガの鳴音を三陸沖および室蘭沖において収録・解析し、鳴音の個体群間変異(方言)の存在の可能性を報告。
3. 勇魚会と海棲哺乳類研究	単著	2010年6月	勇魚, 52: 7-9	勇魚会機関誌の特集への寄稿文。勇魚会の30年の歴史と海棲哺乳類研究への貢献を紹介。
4. 鯨類の社会的認知に関する比較認知科学的研究	単著	2012年3月	平成21年度～平成23年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書, 1-5頁	鯨類がどのように種や個体を認識しているか探るため、視覚および聴覚による弁別実験を実施。その結果を記載した報告書。
5. 書評『イルカの認知科学 異種間コミュニケーションへの挑戦』(村山司著, 東京大学出版会, 2012年)	単著	2012年12月	哺乳類科学, 52(2): 298-299	『イルカの認知科学 異種間コミュニケーションへの挑戦』の書評。
6. 北海道周辺に生息するシャチの社会構造と行動圏の利用様式: 生息地保全への基礎研究	共著	2013年3月	プロ・ナトゥーラ・ファンダ助成成果発表会発表要旨集, 15-16頁	プロ・ナトゥーラファンドの助成を受けて実施した北海道周辺に生息するシャチの社会構造と行動圏の利用様式に関する研究結果の報告。 著者名: 大泉宏・吉岡基・中原史生・三谷曜子・佐々木友紀子・幅祥太・青山桜子・斎野重夫・佐藤晴子
7. 視覚と聴覚の統合-動物の感覚から-	単著	2014年4月	視聴覚教育, 68(4): 4-5	日本視聴覚教育協会から依頼を受け、掲載された寄稿文。動物の視聴覚統合に関する研究を紹介するとともに、視聴覚教育への提案を記載。
8. 鯨類の協力行動に関する比較認知科学的研究	単著	2016年5月	平成24年度～平成27年度科学研究費助成事業研究成果報告書, 1-4頁	鯨類のもつ協調的な社会的知性の進化的基盤を探ることを目的とし、自然的観察法、実験的観察法、実験的分析法を用いて行われた研究。その結果を記載した報告書。
9. 羅臼沖に出現するシャチの個体識別カタログ	共著	2019年5月	北海道シャチ研究大学連合	羅臼沖で頻繁に見られる42個体のシャチについて識別用写真を掲載。鳴音についても代表的なものを掲載し、QRコードを利用して聴くことができる。 著者名: 大泉宏・幅祥太・斎野重夫・三谷曜子・中原史生・山本友紀子・吉岡基

(国際学会発表)				
1. Establishment of receiving system of whale sound using submarine cables	共著	1997年3月	Workshop on Scientific Use of Submarine Cables (Okinawa, Japan)	海底ケーブルを用いた多目的地球環境モニターネットワークシステムの開発に関する研究の一環として、生物動態観測システムを用いた鯨類の追跡調査方法の検討を行った。 発表者名：Miyazaki N & <u>Nakahara F</u> (Abstracts 掲載)
2. Vocal exchange and recognition in bottlenose dolphins, <i>Tursiops truncatus</i>	共著	1997年8月	XXV International Ethological Conference (Vienna, Austria) (査読あり)	ハンドウイルカの音声交換にみられる時間的規則性と音声による個体認識に関する研究結果を報告 発表者名： <u>Nakahara F</u> & Miyazaki N (Abstracts pp. 9)
3. Intra-specific variation in vocalizations of "Tappa-naga", the northern form of short-finned pilot whale	単著	1998年7月	1998 International Forum on Dolphins and Whales (Muroran, Japan)	三陸沖および室蘭沖で行ったタッパナガ（北方系コビレゴンドウ）の鳴音調査結果の報告。種内変異に焦点を当て、解析を行った。 (Program & Abstracts pp. 14)
4. Social functions of cetacean acoustic communication	単著	2001年10月	70th Anniversary of The Japanese Society of Fisheries Science International Commemorative Symposium (Yokohama, Japan) (査読あり)	鯨類の音声コミュニケーションの機能について解説。 (Program & Abstracts pp. 83)
5. Variations in the vocal repertoire of short-finned pilot whales off the Pacific coast of northern Japan	共著	2001年11月	14th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Vancouver, Canada) (査読あり)	北日本の太平洋沿岸に来遊するコビレゴンドウの音声レパートリーの種内変異に関する研究結果を報告。 発表者名： <u>Nakahara F</u> & Amano M (Abstracts pp. 153)
6. Geographical variation in the whistles of the Indo-Pacific bottlenose dolphin populations	共著	2003年7月	1st Conference on Acoustic Communication by Animals (Maryland, USA) (査読あり)	日本沿岸に生息するミナミハンドウイルカのホイッスルにおける地理的変異に関する研究結果を報告。 発表者名：Morisaka T, Shinohara M, <u>Nakahara F</u> & Akamatsu T (Abstracts 掲載)
7. Relationship between background noise and whistles of the Indo-Pacific bottlenose dolphins (<i>Tursiops aduncus</i>)	共著	2003年12月	15th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Greensboro, NC, USA) (査読あり)	ミナミハンドウイルカのホイッスルの音響特性と背景雑音との関係を解析し、報告。 発表者名：Morisaka T, Shinohara M, <u>Nakahara F</u> & Akamatsu T (Abstracts pp. 115)

8. A comparison of the vocalizations of two forms of short-finned pilot whales (<i>Globicephala macrorhynchus</i>) off the Pacific Coast of Japan	共著	2003年12月	15th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Greensboro, NC, USA) (査読あり)	日本の太平洋岸に来遊するコビレゴンドウの北方型と南方型、2つの型間の鳴音の比較に関する研究報告。 発表者名： <u>Nakahara F</u> , Uchida S, Higashi N, Takemura A & Amano M (Abstracts pp. 117)
9. Ambient noise differences may cause the geographical variations on the acoustic signals of the Indo-Pacific Bottlenose Dolphin (<i>Tursiops aduncus</i>) population	共著	2004年4月	18th International Congress on Acoustics (Kyoto, Japan) (査読あり)	ミナミハンドウイルカのホイッスルの音響特性と背景雑音との関係を解析し、報告。 発表者名：Morisaka T, Shinohara M, <u>Nakahara F</u> & Akamatsu T (Abstracts 掲載)
10. Vocal exchanges in delphinids	単著	2005年7月	Kyoto Conference: Delphinid and Primate Social Ecology: A Comparative Discussion (kyoto, Japan)	イルカ類で観察された鳴き交わり行動について報告。 (Program & Abstracts pp. 50)
11. Intraspecific variation in the vocalizations of short-finned pilot whales	共著	2005年8月	IX International Mammalogical Congress (Sapporo, Hokkaido) (査読あり)	コビレゴンドウの鳴音にみられる種内変異について報告。 発表者名： <u>Nakahara F</u> , Uchida S, Higashi N, Takemura A, Mori K & Amano M (Abstracts pp. 393)
12. Vocal tremor and stress in captive bottlenose dolphins	共著	2005年12月	16th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (San Diedo, CA, USA) (査読あり)	飼育下のハンドウイルカにおける鳴音の震えとストレスとの関係について報告。 発表者名： <u>Nakahara F</u> , Kamimura K & Suzuki M (Abstracts pp. 203)
13. Vocal communication and social cognition in dolphins	単著	2008年9月	International Workshop on Comparative Cognitive Science: "Minds in the forest and underwater: Comparative cognitive science on chimpanzees and dolphins" (Nagoya, Japan)	イルカ類における音声コミュニケーションと社会認知について解説。
14. Male mating strategies and reproductive success in captive finless porpoises	単著	2009年10月	18th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Quebec City, Canada) (査読あり)	飼育下の雄のスナメリにみられる繁殖戦略についての研究報告。 (Abstracts pp. 179)

15. Studies on the social cognition of captive bottlenose dolphins	単著	2010年8月	Cop10 Partnership Project, The 15th Kyoto University International Symposium: Biodiversity, Zoos and Aquariums "The Message from Animals" (Nagoya, Japan)	飼育下のハンドウイルカを対象とした社会認知研究を紹介。 (Program & Abstracts pp. 69)
16. Whistle usage during cooperative behavior in captive common bottlenose dolphins	共著	2011年11月	19th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Tampa, FL, USA) (査読あり)	飼育下のハンドウイルカの協力行動時におけるホイッスルの使用に関する研究報告。 発表者名: <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Komaba K, Nakano, Ikeda H, Deki M & Kawakubo A (Program & Abstracts pp. 215)
17. Other-regarding preferences in captive dolphins	共著	2011年12月	20th Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Dunedin, New Zealand) (査読あり)	飼育下のイルカにみられる他者配慮行動に関する研究報告。 発表者名: <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Ikeda H, Komaba K, Nomiyama S, Matsuya A & Kawakubo A (Program & Abstracts pp. 154)
18. Sound exchanges in dolphins	単著	2014年2月	International Symposium "Dolphin Acoustics, Behavior and Cognition" (Shizuoka, Japan)	イルカ類の鳴き交わし行動について解説。 (Program & Abstracts pp. 2)
19. Dolphins playing catch while jumping - Potentialities in communication-related training -	共著	2014年9月	International Marine Animal Trainers' Association (IMATA) 2014 Annual Conference (Orlando, FL, USA) (査読あり)	動物間のコミュニケーションを促進するトレーニングのもつ可能性について、九十九島水族館で行っているジャンピング・キャッチボールという種目を例に解説。 発表者名: Matsuya A, <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Ikeda H, Sato R & Kawakubo A (Program & Abstracts pp.)
20. Acoustic behavior of killer whales off eastern coast of Hokkaido	共著	2015年2月	International Symposium "Baleen Whale Behavior" (Shizuoka, Japan)	北海道東岸に來遊するシャチの音響行動に関する研究結果報告。 発表者名: Sasaki S, Ohizumi H, <u>Nakahara F</u> , Mitani Y, Yamamoto Y, Mizukoshi K, Saino S, Haba S & Yoshioka M (Program & Abstracts pp. 8)
21. Are bottlenose dolphins selfish or altruistic?	共著	2015年2月	International Symposium "Baleen Whale Behavior" (Shizuoka, Japan)	ハンドウイルカの利他性に関する研究結果報告。 発表者名: <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Sato R, Ikeda H, Komaba K, Matsuya A & Kawakubo A (Program & Abstracts pp. 2-3)

22. Spontaneous prosocial choice by captive bottlenose dolphins	共著	2015年12月	21st Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (San Fransisco, CA, USA) (査読あり)	ハンドウイルカが自発的に向社会的な選択をすることを報告。 発表者名： <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Sato R, Ikeda H, Komaba K, Matsuya A & Kawakubo A
23. Saddle patch patterns and acoustic behaviors of the killer whales off Hokkaido, northern Japan	共著	2015年12月	21st Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (San Fransisco, CA, USA) (査読あり)	北海道周辺に来遊するシャチのサドルパッチのパターンと音響行動について報告。 発表者：Sasaki S, Ohizumi H, Mizuno S, Isobe S, <u>Nakahara F</u> , Mitani Y, Yamamoto Y, Mizukoshi K, Saino S, Haba S & Yoshioka M
24. Call repertoire and acoustic behavior of killer whales off Hokkaido, Japan	単著	2017年10月	22nd Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Halifax, NS, Canada) (査読あり)	Workshop "Killer whales in western North Pacific and the Okhotsk Sea" 北海道沖に来遊するシャチのコールレパートリーと音響行動について報告。
25. Satellite-monitored movements of killer whales off Hokkaido, Japan	共著	2017年10月	22nd Biennial Conference on the Biology of Marine Mammals (Halifax, NS, Canada) (査読あり)	北海道沖に来遊するシャチに衛星標識を装着し追跡を行った結果を報告。 発表者：Mitani Y, Andrews RD, Haba S, <u>Nakahara F</u> , Miyamoto H, Ohizumi H, Saino S, Yamamoto Y, Yoshioka M
26. Above-surface vocalizations of captive bottlenose dolphins to attract attention from humans	共著	2019年6月	The 14th International Conference on Environmental Enrichment (Kyoto, Japan) (査読あり)	飼育下のハンドウイルカはなぜ空中で鳴音を発するのか？その謎を解くために観察を行い、人の注意を引くために人の聴き取りやすい音を空中に向けて出している可能性を示唆した。 発表者： <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Komaba K, Sato R, Kaku M & Kawakubo A
27. Investigation of the social preferences of bottlenose dolphins using a Dolphin Acoustic Touch Panel	共著	2019年12月	World Marine Mammal Conference (International Convention Center of Catalonia, Barcelona, Spain) (査読有)	ハンドウイルカの社会的選好性について、開発を行ったイルカ音響タッチパネルを用いて実験を行った結果、同居個体および同種への選好性が示唆された。 発表者： <u>Nakahara F</u> , Komaba M, Komaba K, Sato R, Kaku M & Kawakubo A
28. Receiving sensitivity about the amplitude and frequency of the hydrophones attached to acrylic plate - towards simplification of dolphin sound study at aquariums, 2	共著	2019年12月	World Marine Mammal Conference (International Convention Center of Catalonia, Barcelona, Spain) (査読有)	イルカ音響タッチパネル用に開発した貼付け型水中マイクの音響特性を調べ、アクリル面を通して音を収録した際の音響特性の変化と使用する際の注意点を報告した。 発表者：Yoshida Y, Morisaka T, <u>Nakahara F</u> & Senga Y

(国内学会発表)				
1. スナメリの音響生態に関する研究Iーエコーロケーションによる標的識別実験ー	共著	1993年10月	日本水産学会平成5年度秋季大会 (長崎大学)	スナメリのエコーロケーションによる物体識別能力及び識別時の行動戦略を調べた研究。 発表者名: <u>中原史生</u> , 小井土隆, 竹村暘, 藤丸郁, 齋藤陽子, 中村雅之, 蛭田密 (講演要旨集 219頁)
2. イルカのエコーロケーションによる標的識別能力	単著	1993年12月	1993年度勇魚会シンポジウム (新潟市水族館マリニピア日本海)	飼育下のスナメリを用いて行ったエコーロケーションによる標的識別実験の結果を報告。
3. スナメリの音響生態に関する研究IIーエコー識別能力ー	共著	1994年4月	日本水産学会平成6年度春季大会 (東京水産大学)	人工的にスナメリのソナー音を発射して物体からの反射音の解析を行い、スナメリが物体識別の際にどのような手がかりを用いているか検討。 発表者名: <u>中原史生</u> , 小井土隆, 竹村暘, 中村雅之, 蛭田密 (講演要旨集 24頁)
4. 飼育下のハンドウイルカの音声交換における時間的規則性	共著	1995年9月	日本水産学会平成7年度秋季大会 (京都大学)	ハンドウイルカの音声交換について研究を行い、彼らの発声間隔に時間的なルールがあることを発見。また、音声交換時は個体に特徴的なホイッスルが用いられることを報告。 発表者名: <u>中原史生</u> , 宮崎信之 (講演要旨集 24頁)
5. 音響研究と水族館	単著	1995年9月	1995年度勇魚会シンポジウム「水族館と水生哺乳類研究」 (しながわ水族館)	水族館におけるイルカの音響研究を概説し、自身が実際に行ってきた研究を紹介。
6. 応答の有無がハンドウイルカの発声間隔に及ぼす影響	共著	1996年4月	日本水産学会平成8年度春季大会 (日本大学湘南校舎)	ハンドウイルカの音声交換について研究を行い、呼びかけ音声に対しての応答の有る無しが発声間隔に影響を及ぼしていることを報告。 発表者名: <u>中原史生</u> , 宮崎信之 (講演要旨集 29頁)
7. イルカ交雑種の音声発達と母子間における音声行動	共著	1996年11月	日本動物行動学会第15回大会 (東京大学)	ハンドウイルカとカマイルカの間にも生まれた交雑種を出生直後から観察し、音声の発達過程と母子間での音声のやりとりに関する研究を行った。 発表者名: <u>中原史生</u> , 松崎健三, 宮崎信之 (要旨集 36頁)
8. イルカの音声発達と個体間音声行動	単著	1997年2月	第9回国際海洋生物研究所研究集会「'97 海獣類に関する国際シンポジウムー研究の現状と課題ー」 (千葉県立長狭高校)	イルカ類の音声行動について、個体発生及び個体間行動に関する研究結果を報告。
9. 小型ハクジラ類の音声行動学	単著	1998年3月	東京大学海洋研究所共同利用シンポジウム「わが国における鯨類研究の最近の動向と今後の展開」 (東京大学海洋研究所)	小型ハクジラ類の音声行動の機能と発達に関する研究について、その現状と動向を紹介。 (要旨集 4頁)

10. 御蔵島周辺に生息するハンドウイルカの音声行動	共著	1998年10月	日本哺乳類学会1998年度大会（群馬県富岡市中央公民館）	伊豆諸島御蔵島において行ったハンドウイルカの水中観察の結果を基に、野生のハンドウイルカの音声行動に関する報告。 発表者名：中原史生，宮崎信之 （講演要旨集 53頁）
11. 野生イルカの音声研究	単著	1998年10月	1998年度勇魚会シンポジウム（大阪商工会議所賢島研修センター）	伊豆諸島御蔵島で行ったハンドウイルカでの研究を中心に、野生イルカの音声研究について紹介。
12. ハンドウイルカの音声認識：プレイバック実験	共著	1998年11月	日本動物行動学会第17回大会（東京農工大学）	ハンドウイルカの音声による個体認識に関する研究。プレイバック実験を基に、音声によって個体認識が行えることを証明。 発表者名：中原史生，鳥羽山照夫，宮崎信之 （発表要旨集 29頁）
13. イルカのことば	単著	1999年9月	1999年度勇魚会シンポジウム「鯨類のからだと心の神秘」（港勤労福祉会館）	ヒトのことば（言語）の特徴とイルカの音声コミュニケーションの特徴を比較した結果を報告。
14. ハンドウイルカのパルス音によるコミュニケーション	単著	2000年11月	日本動物行動学会第19回大会（滋賀県立大学）	飼育下のハンドウイルカを対象とし、パルス音の発声文脈を解析し、その機能について検討。 （講演要旨集 44頁）
15. バンドウイルカのホイッスル音の地域間差異	共著	2001年3月	第48回日本生態学会（熊本県立大学）	日本沿岸に生息するミナミハンドウイルカのホイッスルにおける地域間変異に関する研究結果を報告。 発表者名：森阪匡通，篠原正典，赤松友成，中原史生 （講演要旨集 掲載）
16. ミナミハンドウイルカのコミュニケーション音の地域間差異	共著	2002年11月	日本動物行動学会第21回大会（立教大学）	日本沿岸に生息するミナミハンドウイルカのホイッスルにおける地域間変異に関する研究結果を報告。 発表者名：森阪匡通，篠原正典，赤松友成，中原史生 （講演要旨集 69頁）
17. 飛行機目視調査（2000年）によるスナメリの分布と個体数推定 2）仙台湾～内房海域	共著	2002年11月	東京大学海洋研究所共同利用研究集会シンポジウム「沿岸性小型鯨類スナメリの生態と保全」（東京大学海洋研究所）	セスナ機を使用した目視調査に基づく東日本沿岸におけるスナメリの分布と個体数推定に関する報告。 発表者名：天野雅男，中原史生，早野あづさ （講演要旨集 9頁）
18. スナメリのクリックスの特性とエコーロケーション能力	単著	2002年11月	東京大学海洋研究所共同利用研究集会シンポジウム「沿岸性小型鯨類スナメリの生態と保全」（東京大学海洋研究所）	飼育下のスナメリのクリックスの音響特性とエコーロケーション能力についての実験結果を報告。 （講演要旨集 6頁）

19. ミナミハンドウイルカのコミュニケーション音の地域間差異	共著	2003年4月	平成15年度日本水産学会大会（東京水産大学）	日本沿岸に生息するミナミハンドウイルカのホイッスルにおける地域間変異に関する研究結果を報告。 発表者名：森阪匡通，篠原正典，赤松友成， <u>中原史生</u> （講演要旨集 20頁）
20. コビレゴンドウの鳴音の個体群間比較	共著	2003年4月	平成15年度日本水産学会大会（東京水産大学）	日本沿岸に生息するコビレゴンドウの北方型個体群と南方型個体群の鳴音を比較し、その違いを報告。 発表者名： <u>中原史生</u> ，内田詮三，東直人，竹村暁，森恭一，天野雅男 （講演要旨集 23頁）
21. 背景雑音がミナミハンドウイルカの音声シグナルに与える影響	共著	2004年5月	海洋音響学会2004年度研究発表会（東京工業大学）	背景雑音がミナミハンドウイルカの鳴音の音響特性（周波数、持続時間など）に与える影響を報告。 発表者名：森阪匡通，篠原正典， <u>中原史生</u> ，赤松友成 （講演要旨集 掲載）
22. 環境中の背景雑音がミナミハンドウイルカの音声に与える影響	共著	2004年8月	第51回日本生態学会大会（釧路市観光国際交流センター）	環境中の背景雑音がミナミハンドウイルカの鳴音の音響特性（周波数、持続時間など）に与える影響を報告。 発表者名：森阪匡通，篠原正典， <u>中原史生</u> ，赤松友成 （講演要旨集 掲載）
23. オキゴンドウとハンドウイルカは鳴き交わすか？	共著	2004年12月	日本動物行動学会第23回大会（九州大学箱崎キャンパス）	飼育下のオキゴンドウとハンドウイルカの間で観察された鳴き交わし行動について報告し、異種間コミュニケーションの機能について推測。 発表者名： <u>中原史生</u> ，鈴木七生，酒井孝，長谷川修平，鳥羽山照夫 （発表要旨集 49頁）
24. 中周波鳴音によるイルカの探知	単著	2004年12月	海洋音響学会第3回会声を利用した海洋生物の音響観測部会（東京海洋大学品川キャンパス）	イルカ類の中周波鳴音を利用してイルカを探知する方法について解説。
25. 中周波鳴音によるイルカの探知	単著	2006年5月	海洋音響学会2006年度第1回シンポジウム（東京海洋大学品川キャンパス）	イルカ類の中周波鳴音を利用してイルカを探知する方法について解説。
26. イルカの音声コミュニケーションと社会的認知	単著	2006年10月	日本動物心理学会第66回大会（京都大学）	イルカ類のコミュニケーション音声の種ごとの特徴と社会構成の比較から、イルカの社会的認知との関連を推測。
27. 沖縄本島北部海域に來遊するコビレゴンドウの鳴音	共著	2007年3月	平成19年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	沖縄本島北部海域に來遊するコビレゴンドウの鳴音を解析し、その音響特性について報告。 発表者名： <u>中原史生</u> ，江本博俊，東直人，内田詮三 （講演要旨集 190頁）

28. 飼育下シャチにおける音声コミュニケーションと行動的文脈の分析	共著	2007年9月	日本哺乳類学会2007年度大会（東京農工大学府中キャンパス）	飼育下のシャチの音声コミュニケーションの行動的文脈を解析。 発表者名：山本友紀子， <u>中原史生</u> ，荒井一利，武田庄平 （講演要旨集 掲載）
29. 鯨類の鳴音にみられる種特異性と種内変異	単著	2008年6月	東京大学海洋研究所共同利用研究集会「生理，行動，分子から見た海棲哺乳類の生物学－最近の話題から－」（東京大学海洋研究所）	日本沿岸に生息する鯨類の鳴音にみられる種特異性と種内変異について報告。 （講演要旨集 6頁）
30. 沖縄本島北部海域に來遊するコビレゴンドウの音響行動	共著	2009年11月	日本哺乳類学会2009年度台北大会（台湾大学）	沖縄本島北部海域に來遊するコビレゴンドウの音響行動を解析し、報告。 発表者名： <u>中原史生</u> ・東直人・岡部晴菜・江本博俊・内田詮三 （講演要旨集 83頁）
31. SPP事業 講座型学習活動の実践～アクアワールド茨城県大洗水族館との連携事例～	共著	2009年12月	第50回日本動物園水族館教育研究会大洗大会（アクアワールド大洗）	茨城高等学校・中学校が実施校として採択されたサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業の実践例を紹介。 発表者名：檜山俊彦・ <u>中原史生</u> ・伊師直之
32. ハンドウイルカの視覚刺激による種弁別	共著	2010年8月	日本動物心理学会第70回大会（帝京大学八王子キャンパス）	飼育下のハンドウイルカを対象に実施した視覚による種弁別実験の結果を発表。 発表者名： <u>中原史生</u> ，駒場昌幸，駒場久美子，池田比佐子，出来真由美，中野仁志，川久保晶博 （講演要旨集 67頁） 大会発表要旨：動物心理学研究，60(2)：210
33. コビレゴンドウにおける鳴き交わり	共著	2010年11月	日本動物行動学会第29回大会（沖縄県男女共同参画センター）	沖縄本島北部海域に來遊するコビレゴンドウの音響行動を解析し、鳴音の機能と鳴き交わり行動について報告。 発表者名： <u>中原史生</u> ，東直人，岡部晴菜，江本博俊，内田詮三 （講演要旨集 66頁）
34. 釧路沖に來遊するシャチの鳴音の音響特性	共著	2011年3月	日本水産学会平成23年度春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	釧路沖に來遊するシャチの鳴音の音響特性に関する解析結果を報告（なお、東日本大震災の影響で大会は中止され、要旨集発行をもって発表に代えることとなった）。 発表者名： <u>中原史生</u> ，大泉宏 （講演要旨集 75頁）
35. 三陸沖に來遊するコビレゴンドウの鳴音レパトリーとその経年変化	単著	2011年3月	日本水産学会平成23年度春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	三陸沖に來遊するコビレゴンドウの鳴音のレパトリーとその経年変化について報告。（なお、東日本大震災の影響で大会は中止され、要旨集発行をもって発表に代えることとなった）。 （講演要旨集 75頁）

36.	ハンドウイルカはホイッスルを発してタイミングを合わせる	共著	2011年9月	Animal2011(日本動物心理学会第71回大会・日本動物行動学会第30回大会・応用動物行動学会/日本家畜管理学会2011年度大会 合同学会) (慶應義塾大学三田キャンパス)	飼育下のハンドウイルカがジャンピングキャッチボールという種目を実施する際に、ホイッスルを発してタイミングを合わせている可能性について報告。 発表者名： <u>中原史生</u> ，駒場昌幸，駒場久美子，中野仁志，池田比佐子，出来真由美，川久保晶博 (講演要旨集 51頁)
37.	ハンドウイルカとハナゴンドウの視覚刺激による種と個体弁別	共著	2011年9月	Animal2011(日本動物心理学会第71回大会・日本動物行動学会第30回大会・応用動物行動学会/日本家畜管理学会2011年度大会 合同学会) (慶應義塾大学三田キャンパス)	飼育下のハンドウイルカとハナゴンドウを対象に実施した視覚による種および個体弁別実験の結果を発表。 発表者名： <u>中原史生</u> ，駒場昌幸，駒場久美子，池田比佐子，出来真由美，中野仁志，川久保晶博 (講演要旨集 51頁) 大会発表要旨：動物心理学研究，61(2)：210
38.	釧路沖におけるシャチの音響行動による空間認識	共著	2012年3月	平成24年度日本水産学会春季大会(東京海洋大学品川キャンパス)	発表者名：青山桜子・杉崎綾乃・伊藤友紀・ <u>中原史生</u> ・大泉宏
39.	釧路・羅臼周辺海域に來遊するシャチの音響行動	共著	2013年3月	平成25年度日本水産学会春季大会(東京海洋大学品川キャンパス)	発表者名：青山桜子・大泉宏・幅祥太・三谷曜子・斎野重夫・ <u>中原史生</u> ・吉岡基
40.	東日本太平洋側沿岸域におけるスナメリの2012年の分布と個体数	共著	2013年3月	平成25年度日本水産学会春季大会(東京海洋大学品川キャンパス)	発表者名：白木原国雄・ <u>中原史生</u> ・篠原正典・白木原美紀
41.	沿岸生態系の上位捕食者スナメリの分布の震災前後の変化	共著	2013年6月	平成25年度東北マリンサイエンス拠点形成事業(海洋生態系の調査研究)全体会議(東北大学川内北キャンパス)	発表者名：白木原国雄・ <u>中原史生</u> ・篠原正典・白木原美紀
42.	イルカの社会的認知研究	単著	2013年9月	第29回日本霊長類学会・日本哺乳類学会2013年度合同大会(岡山理科大学)	ミニシンポジウム『海のこころ，森のこころ—鯨類と霊長類の知性に関する比較認知科学—』
43.	ハンドウイルカとハナゴンドウにおける向社会的行動	共著	2013年9月	日本動物心理学会第73回大会(筑波大学)	発表者名： <u>中原史生</u> ・駒場昌幸・池田比佐子・駒場久美子・野見山理美・松谷綾夏・川久保晶博 (講演要旨集 68頁) 大会発表要旨：動物心理学研究，63(2)：178
44.	ハンドウイルカ、ハナゴンドウの物をともなった社会的遊び	共著	2013年11月	日本動物行動学会第32回大会(広島大学)	発表者名：池田比佐子・ <u>中原史生</u> ・駒場昌幸・駒場久美子・野見山理美・松谷綾夏・川久保晶博 (講演要旨集 72頁)
45.	ハンドウイルカとハナゴンドウは他個体に配慮する選好性を有するか	共著	2013年11月	日本動物行動学会第32回大会(広島大学)	発表者名： <u>中原史生</u> ・駒場昌幸・池田比佐子・駒場久美子・野見山理美・松谷綾夏・川久保晶博 (講演要旨集 46頁)

46. 北海道近海に生息するシャチのコールタイプの種類と海域間の比較	共著	2014年3月	平成26年度日本水産学会春季大会（北海道大学函館キャンパス）	発表者名：山本友紀子・水越楓・中原史生・青山桜子・大泉宏・幅祥太・吉岡基・三谷曜子・斎野重夫
47. 仙台湾・福島県沿岸域におけるスナメリの2013年の分布と個体数	共著	2014年3月	平成26年度日本水産学会春季大会（北海道大学函館キャンパス）	発表者名：白木原国雄・中原史生・篠原正典・白木原美紀
48. イルカ類の向社会的行動	単著	2014年9月	日本心理学会第78回大会（同志社大学）	公募シンポジウム『向社会行動の発生とそのメカニズムー進化の視点、発達の視点、神経科学の視点からー』
49. 単独性のスナメリが成す大群は“烏合の衆”か？	共著	2014年11月	日本動物行動学会第33回大会（長崎大学）	発表者名：篠原正典・中原史生・白木原美紀・白木原国雄（講演要旨集 84頁）
50. ハンドウイルカやハナゴンドウは利他的に振る舞うか？	共著	2014年11月	日本動物行動学会第33回大会（長崎大学）	発表者名：中原史生・駒場昌幸・佐藤瞭一・池田比佐子・駒場久美子・松谷綾夏・川久保晶博（講演要旨集 54頁）
51. 北海道沿岸に来遊するシャチ（Orcinus orca）の音響行動解析と他海域との比較	共著	2014年11月	2014年度勇魚会シンポジウム「海棲哺乳類の分布・資源・保全」（京都大学）	発表者名：水越楓・山本友紀子・中原史生・大泉宏・青山桜子・三谷曜子・吉岡基・幅祥太・斎野重夫
52. ハンドウイルカのホイッスル音に関する研究	共著	2015年1月	長崎県生物学会第44回大会（長崎大学）	発表者名：松谷綾夏・中原史生・駒場昌幸・駒場久美子・池田比佐子・佐藤瞭一・川久保晶博
53. 北海道東部海域に出現するシャチの鳴音発生頻度	共著	2015年3月	平成27年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	発表者名：佐々木史織・大泉宏・幅祥太・三谷曜子・斎野重夫・中原史生・水越楓・山本友紀子・吉岡基（講演要旨集 37頁）
54. 北海道東部海域に出現するシャチのサドルパッチの形態的変異	共著	2015年3月	平成27年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	発表者名：大泉宏・水野志保・磯部詩織・佐々木史織・幅祥太・斎野重夫・水越楓・山本友紀子・三谷曜子・中原史生・吉岡基（講演要旨集 38頁）
55. 仙台湾・福島県沿岸域におけるスナメリの2014年の分布と個体数	共著	2015年3月	平成27年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	発表者名：白木原国雄・中原史生・篠原正典・白木原美紀（講演要旨集 154頁）

56. Spontaneous prosocial choice by captive bottlenose dolphins	共著	2015年9月	日本動物心理学会第75回大会（日本女子大学目白キャンパス）	ハンドウイルカが自発的に向社会的な選択をすることを報告。 発表者名：Nakahara F, Komaba M, Sato R, Ikeda H, Komaba K, Matsuya A & Kawakubo A (講演要旨集 72頁)
57. スナメリの出生率と親子連れ利用海域の評価	共著	2016年3月	平成28年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	スナメリの出生率と親子連れ利用海域を評価。 発表者：白木原国雄・中原史生・篠原正典・白木原美紀 (講演要旨集 119頁)
58. 北海道東部海域に出現するシャチの回遊追跡（速報）	共著	2016年3月	平成28年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	衛星標識タグを装着したシャチの回遊追跡結果を報告。 発表者：三谷曜子・Andrews RD・幅祥太・宮本春奈・中原史生・大泉宏・斎野重夫・山本友紀子・吉岡基 (講演要旨集 51頁)
59. 北海道東部に来遊するシャチの音声行動	共著	2016年3月	平成28年度日本水産学会春季大会	北海道東部海域に来遊するシャチの音声と行動との関係を解析し報告。 発表者：水越楓・山本友紀子・大泉宏・幅祥太・斎野重夫・三谷曜子・中原史生・佐々木史織・吉岡基・幸島司郎 (講演要旨集 52頁)
60. 北海道東部海域におけるシャチ (<i>Orcinus orca</i>) の分布と生息環境	共著	2016年12月	2016年度勇魚会シンポジウム（名古屋港ポートビル）	北海道東部海域におけるシャチの分布に与える環境要因を報告。 発表者：宮本春奈・岩原由佳・幅祥太・中原史生・大泉宏・斎野重夫・山本友紀子・吉岡基・三谷曜子
61. 北海道東部海域に出現するシャチのコールタイプからみた群れ間関係とその発生状況について	共著	2017年3月	平成29年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	北海道東部海域に来遊するシャチのコールタイプを解析し、群れおよび行動間で比較を行った。 発表者：佐々木史織・吉岡基・大泉宏・幅祥太・三谷曜子・斎野重夫・中原史生・山本友紀子
62. シャチの個体識別写真の画質が自然標識の視認性に与える影響	共著	2017年3月	平成29年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	シャチの個体識別写真の画質が自然標識の視認性に与える影響について評価を行った。 発表者：大泉宏・森野あかね・照井さつき・幅祥太・斎野重夫・三谷曜子・中原史生・山本友紀子・佐々木史織・吉岡基
63. 北海道東部海域におけるシャチの移動と潜水行動	共著	2017年8月	行動2017（日本動物行動学会第36回大会・第77回日本動物心理学会・応用動物行動学会/日本家畜管理学会2017年度秋季研究発表会・第27回日本行動神経内分泌研究会合同大会）（東京大学駒場キャンパス）	北海道東部海域におけるシャチの移動と潜水行動について報告。 発表者：三谷曜子・Russel D. Andrews・幅祥太・宮本春奈・中原史生・大泉宏・斎野重夫・山本友紀子・吉岡基
64. 北海道東部海域に来遊するシャチの音響行動	共著	2017年10月	第1回犬山鯨類鰭脚類行動シンポジウム（京都大学霊長類研究所）	北海道東部海域に来遊するシャチの音響行動について報告。 発表者：中原史生・山本友紀子・佐々木史織・水越楓・大泉宏・三谷曜子・幅祥太・斎野重夫・吉岡基

65. 北海道東部周辺海域におけるシャチ (<i>Orcinus orca</i>) の個体識別と群れ構造	共著	2018年3月	平成30年度日本水産学会春季大会 (東京海洋大学品川キャンパス)	北海道東部周辺海域に來遊するシャチの個体識別と群れ構造について報告。 発表者: 大泉宏・幅翔太・中原史生・三谷曜子・斎野重夫・吉岡基
66. 釧路沖のシャチにおけるホイッスルとコールの音響特性	共著	2018年3月	平成30年度日本水産学会春季大会 (東京海洋大学品川キャンパス)	北海道釧路沖に來遊するシャチのホイッスルとコールの音響特性について報告。 発表者: 武内一真・古庄遙・國正歩・中原史生・三谷曜子・幅祥太・斎野重夫・吉岡基・大泉宏
67. 茨城千葉沿岸域におけるスナメリ親子の出現海域	共著	2018年9月	日本哺乳類学会2018年度大会 (信州大学伊那キャンパス)	茨城千葉沿岸域で行ったセスナ機からの目視調査に基づいてスナメリ親子の出現海域を報告。 発表者: 白木原美紀・中原史生・篠原正典・白木原國雄
68. 飼育下のハンドウイルカはなぜ空中で鳴音を発するのか?	共著	2018年9月	日本動物行動学会第37回大会 (京都大学)	飼育下のハンドウイルカが空中で発する鳴音について、その音響特性と空中発声の機能について報告。 発表者: 中原史生・駒場昌幸・駒場久美子・佐藤暲一・川久保晶博 (講演要旨集 55頁)
69. 茨城千葉沿岸域におけるスナメリの飛行機調査—親子を探して—	共著	2018年10月	第2回犬山鯨類鰭脚類行動シンポジウム (京都大学霊長類研究所)	茨城千葉沿岸域で行ったセスナ機からの目視調査について、その研究手法の有用性とスナメリ親子の出現海域を報告。 発表者: 白木原美紀・中原史生・篠原正典・白木原國雄
70. 根室海峡に來遊するシャチの採餌行動に関する研究	共著	2019年3月	2018年度勇魚会シンポジウム (静岡産学交流センター B-nest)	根室海峡で行った調査船からの音響調査に基づき、シャチの採餌行動と海底地形や餌生物の分布との関係を報告。 発表者: 菌部のぞみ・中原史生・大澤克揮・大泉宏・斎野重夫・吉岡基・三谷曜子
71. マイルカ科鯨類はどのような文脈で鳴音を発するのか?	単著	2019年9月	日本心理学会第83回大会 (立命館大学茨木キャンパス)	公募シンポジウム『海に挑むこころの科学(II)—Dolphin Cognition Updated—』 マイルカ科鯨類が鳴音を発する文脈を敵対信号、配偶信号、社会的統合信号、環境信号の4つのカテゴリーに分けて紹介。 発表者: 中原史生
72. 根室海峡に來遊するシャチの鳴き交わりにみられる規則性と変異	共著	2019年11月	日本動物行動学会第38回大会 (大阪市立大学)	根室海峡に來遊するシャチの鳴き交わりについて調べ、時間的規則性や鳴音のマッチング、鳴音の群れ内変異について報告。 発表者: 中原史生・山本友紀子・大泉宏・三谷曜子・北夕紀・幅祥太・斎野重夫・吉岡基
73. 行動観察と鳴音記録による根室海峡におけるシャチの採餌場所の推定	共著	2020年3月	日本水産学会令和2年度春季大会 (東京海洋大学品川キャンパス) (新型コロナウイルスの影響で大会開催中止も講演要旨集発行をもって大会成立とみなす)	根室海峡に來遊するシャチの行動観察と鳴音記録から推定を行ったシャチの採餌場所について報告。 発表者: 菌部のぞみ・中原史生・大泉宏・斎野重夫・吉岡基・三谷曜子

74. mtDNAハプロタイプによる北海道周辺海域に來遊するシャチの生態型解明	共著	2021年3月	令和3年度日本水産学会春季大会（オンライン開催）	北海道東部海域に來遊するシャチの遺伝子分析を行い、生態型の特定を行った。 発表者：三谷曜子・北夕紀・吉岡基・ <u>中原史生</u> ・齋野重夫・大泉宏
75. 深層学習を用いた北海道東部海域に來遊するシャチのコール分類手法開発の試み	共著	2021年3月	令和3年度日本水産学会春季大会（オンライン開催）	北海道東部海域に來遊するシャチのコール分類において深層学習を用いた分類手法の開発を試みた。 発表者：大槻優喜・大泉宏・北夕紀・齋野重夫・ <u>中原史生</u> ・吉岡基・三谷曜子
76. 空撮映像を用いたシャチのボディコンディション評価法の検討	共著	2022年3月	令和4年度日本水産学会春季大会（オンライン開催）	ドローンを用いて得たシャチの空撮映像からボディコンディション評価をするための計測方法を検討した。 発表者：内藤昭・北夕紀・ <u>中原史生</u> ・三谷曜子・吉岡基・齋野重夫・大泉宏
77. 根室海峡におけるシャチの群れ構成とコールタイプの出現頻度	共著	2022年9月	日本哺乳類学会2022年度大会（オンライン開催）	根室海峡に來遊するシャチの群れ構成とコールタイプの出現頻度の関係について報告を行った。 発表者：北浦愛望・小川千尋・大泉宏・北夕紀・齋野重夫・ <u>中原史生</u> ・三谷曜子・吉岡基
78. 北海道東部に來遊するシャチ (<i>Orcinus orca</i>) のミトコンドリア全ゲノム解析	共著	2023年3月	日本生態学会第70回全国大会（オンライン開催）	北海道東部に來遊するシャチのミトコンドリア全ゲノムの解析結果について報告を行った。 発表者：河合夏美・三谷曜子・早川卓志・北・北夕紀・吉岡基・大泉宏・ <u>中原史生</u> ・齋野重夫
79. RTKドローンを用いた鯨類の体長測定法の開発	共著	2023年3月	令和5年度日本水産学会春季大会（東京海洋大学品川キャンパス）	RTK-GPSを利用する測量用ドローンを用い、海上での鯨類の体長等の測定方法を検討した結果について報告を行った。 発表者：小加部雄真・佐藤朋哉・伊藤光樹・ <u>中原史生</u> ・北夕紀・齋野重夫・三谷曜子・吉岡基・大泉宏
(演奏会・展覧会等) 1.				
(招待講演・基調講演) 1. イルカのコミュニケーション	単著	2003年9月	東海大学海洋学部サテライトシンポジウム「イルカとクジラーその魅力をさぐる」（東海大学短期大学部）	
2. 野生イルカの鳴音と行動	単著	2010年2月	第7回マリノサイエンス・フォーラム（東京大学弥生講堂）	
3. 海棲哺乳類研究と勇魚会	単著	2010年3月	2009年度勇魚会（海棲哺乳類の会）シンポジウム「勇魚会創立30周年記念シンポジウム」（東海大学海洋学部）	

4. ハンドウイルカは鳴音を発してタイミングを合わせる？	単著	2012年11月	第9回マリノサイエンス・フォーラム (東海大学高輪キャンパス)	
5. Sound exchanges in dolphins	単著	2014年2月	国際シンポジウム (JSTテニユアトラック普及・定着事業による)「イルカの音、行動、認知」 (Shizuoka Convention & Arts Center GRANSHIP)	
6. イルカの鳴音からわかること	単著	2015年11月	沖縄ザトウクジラ会議2015 (沖縄県トラック協会)	ホエールウォッチング事業者を対象に鯨類の鳴音の聴き分け方について講演
7. イルカ音響タッチパネルの開発と音響および認知研究への活用	単著	2016年12月	2016年度勇魚会シンポジウム (名古屋港ポートビル)	イルカ音響タッチパネルの開発とその音響および認知研究への活用について講演
8. 飼育鯨類を研究する：行動、認知、福祉の研究手法	単著	2018年7月	日本鯨類研究協議会平成30年度通常総会 (ホテルキャッスルプラザ多賀城)	
(受賞(学術賞等)) 1.				

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択)						
1. 小型ハクジラ類のコミュニケーションと行動について	代表	特別研究員	1996～1997年度	日本学術振興会	1800千円	
2. 室蘭におけるタツパナガの個体群識別法を用いた社会構造の研究	協力	基盤C	1996～1998年度	日本学術振興会	0千円	代表：天野雅男 (東京大学)
3. 水中鳴音を指標とした鯨類の個体群判別	代表	若手B	2002～2004年度	日本学術振興会	3100千円	
4. マッコウクジラの潜水生態に関する研究	分担	基盤C	2003～2005年度	日本学術振興会	0千円	代表：天野雅男 (東京大学)
5. 鯨類の社会的認知に関する比較認知科学的研究	代表	基盤C	2009～2011年度	日本学術振興会	2800千円	

6. 海のこころ、森のこころ-鯨類と霊長類の知性に関する比較認知科学-	分担	基盤S	2011～2014年度	日本学術振興会	12500千円	代表：友永雅己（京都大学）
7. 鯨類の協力行動に関する比較認知科学的研究	代表	基盤C	2012～2015年度	日本学術振興会	4400千円	
8. 野生の認知科学：こころの進化とその多様性の解明のための比較認知科学的アプローチ	分担	基盤S	2015～2019年度	日本学術振興会	8300千円	代表：友永雅己（京都大学）
9. 北海道周辺海域に出現するシャチの個体識別および鳴音レパートリーのカタログ化	分担	基盤C	2015～2017年度	日本学術振興会	976千円	代表：大泉宏（東海大学）
10. 沿岸性鯨類スナメリの個体群構造と個体群存続可能性分析	連携	基盤C	2015～2017年度	日本学術振興会	0千円	代表：白木原国雄（東京大学）
11. 沿岸性鯨類スナメリの生息地利用の解明－育児海域の推定	連携	基盤C	2016～2018年度	日本学術振興会	0千円	代表：白木原美紀（東邦大学）
12. マイルカ科鯨類における音声コミュニケーションと社会的知性の進化	代表	基盤C	2017～2021年度	日本学術振興会	3400千円	
13. 根室海峡におけるシャチの若齢個体加入状況に関する研究	分担	基盤B	2021～年度	日本学術振興会	300千円	代表：大泉宏（東海大学）
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))						
1. イルカの生態の謎に迫る	連携	サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業 講座型学習活動(プランA)	2008年度	独立行政法人科学技術振興機構	120千円	実施機関：茨城高等学校(総額500千円)
2. イルカの生態の謎に迫る	連携	サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト事業 講座型学習活動(プランB)	2009年度	独立行政法人科学技術振興機構	300千円	実施機関：茨城高等学校・茨城中学校(総額1935千円)
3. 北海道周辺に生息するシャチの社会構造と行動圏の利用様式：生息地保全への基礎研究	分担	プロ・ナトゥーラ・ファンド国内研究助成	2012年度	公益財団法人自然保護助成基金	0千円	代表：大泉宏（東海大学）

4. 沿岸生態系の上位捕食者スナメリの分布の震災前後の変化	参画	東北マリンサイエンス拠点形成事業(海洋生態系の調査研究)	2012～2017年度	文部科学省 海洋生態系研究開発拠点機能形成事業費補助金	旅費	課題2：海洋生態系変動メカニズムの解明 テーマ2：地震・津波による生態系攪乱とその後の回復過程に関する研究 (代表機関：東京大学大気海洋研究所)
5. 知床海域におけるシャチの生息地利用の解明と持続的観光資源としての保全に関する研究	分担	プロ・ナトゥーラ・ファンド国内研究助成	2016年度	公益財団法人自然保護助成基金	0千円	代表：三谷曜子(北海道大学) (総額800千円)
(共同研究・受託研究受入れ)						
1. 海域自然環境保全基礎調査 海棲動物調査(スナメリ生息調査)	協力	受託	1997～2001年度	環境省	旅費	
2. 飼育下のシャチの音響行動に関する研究	代表	共同	2003～2005年度	国際海洋生物研究所	滞在費	
3. 亜熱帯性水生生物に関する調査研究 鯨類等の海生ほ乳類に関する調査研究	分担	受託	2004～2010年度	(財)海洋博覧会記念公園管理財団	400千円	
4. 三陸沖に來遊する鯨類の音響生態に関する研究	代表	共同利用	2006～2009年度	東京大学海洋研究所	324千円	
	代表	共同利用	2010年度	東京大学大気海洋研究所	119千円	
5. イルカ被害対策	協力	受託	2008～2010年度	東京都島しょ農林水産総合研究センター	240千円	
6. シャチの生態に関する調査研究(行動追跡・観察、撮影画像・音声等の分析)	実施責任	共同	2017年度～	東海大学、常磐大学、北海道大学、日本放送協会	0千円	共同研究契約
7. 北海道東部海域に來遊するシャチの生態に関する研究	分担	共同	2019～2020年度	国際海洋生物研究所	調査費	代表：吉岡基(三重大学) (総額600千円)
(奨学・指定寄付金受入れ)						
1.						

(学内課題研究(共同研究)) 1. ミュージアム活動と地域振興との関係性に関する基礎的研究 2. ヒトの攻撃行動に関わる制御変数の検討	分担 分担→代表	— —	2000年度 2017～2018年度	— —	0千円 千円	
(学内課題研究(各個研究)) 1. 人工雑音が野生動物に与える影響	—	—	2006～2008年度	—	1123千円	
(学内課題研究(特別奨励研究)) 1. 鯨類の社会的知性と種間交雑との関係についての比較認知科学的研究	—	—	2022年度～	—	797千円	
(知的財産(特許・実用新案等)) 1.	—			—	—	